--- ある心情の編制 ----

原 田 達

Phenomenology of Marathon

--- A Way of Formation of Feelings ---

Tohru HARADA

1970年代、この国にジョギング・ブームがおこった。その後ブームは定着し、ジョギングは、わたしたち現代人の日常的な生活風景となった。たとえば、市民ランナーのための雑誌『ランナーズ』が創刊されたのは1976年、当時ジョギング愛好者は約200万人といわれたが、現在では約2,900万人と想定されており、この雑誌も創刊当時の発行部数5,000をおおきく伸ばして、現在では23万部に達している。このことが、ジョギングの日常化を端的にしめしている。当時からジョギングは、現代人の「健康志向」と結びつけられて理解されることがおおかった。ストレスの解消、肥満対策がおおきな動機だと考えられた。現在でもジョギング愛好者にアンケートをとれば、ジョギングをはじめた動機として「健康」をあげる人がもっともおおい。しかし、ジョギングを単純に「健康志向」のスポーツと理解してよいのだろうか。以下ではフル・マラソンを素材にして、「健康志向」の背後にあるものを摘出してみたい。それは同時に、マラソンを題材にした「近代」の再考という意味をもつだろう。というのは、「健康」とは近代社会の産物であり、この「健康志向」の背後を考察することは、「近代」の背後に目を向けることを意味するからである。そしてこの作業は、現代社会における人びとの心情のあり方を叙述することにもなるはずである。

¹⁾ この論文を書き上がることができたのは、市民マラソン大会で出会ったおおくのランナーのおかげである。「一緒に行きましょう」と声をかけてくれたランナー、おにぎりをわけてくれたランナー、消炎スプレーを貸してくれたランナー、その他おおくのランナーにこの論文を捧げたい。とりわけ、走ることの楽しさを夜ふけまで語りあった小原哲・道子夫妻、太田薫・光枝夫妻とのヨロン・ヴィレッジでの思い出のために。

ところで、ここで用いられる考察の方法論は、わたしのフル・マラソン体験を基礎にする。 その意味で以下の叙述は、内観的方法をとったきわめて主観的な叙述であり、マラソンの現象 学的記述にすぎない。

0. フル・マラソンの現状

しかし、いくら内観的方法といっても、フル・マラソンの現状を把握しておくことがまず必要となるだろう。ランニング文化研究所発行の『全国フルマラソン・ランキング』(1993 年版)には、1992 年 4 月から 1993 年 3 月までにおこなわれた 79 のフル・マラソン大会の完走者データが記載されている。ここに集積されたデータ総数は 86,273 件、掲載総数は 67,906 件におよぶ。このデータ数がすでにフル・マラソンの盛況をしめしている。

しかも,このデータはフル・マラソンを走った人びとの実数をしめすものではない。集積されたデータは制限時間内に完走したランナーのデータであり,またデータ処理上不備のある大会のデータは掲載されていない。 それゆえ, 92 年度に実際にフル・マラソンを走った人の数は,確実に 10 万人をこえるものと思われる。

この『全国フルマラソン・ランキング』を男女別,年齢階層別に図示したものが図 1, 図 2 である。 男性のピークは 41 歳から 45 歳の 10,156 人(二位は 36 歳から 40 歳の 10,135 人), 女性では 21 歳から 25 歳が最大で 1,297 人(二位は 41 歳から 45 歳の 1,170 人) である。 ただ, このデータを男女合計して考えれば, フル・マラソンをもっともおおく走る世代が 36 歳から 45 歳の中年世代であることがわかる。 また, 女性にはっきりと現れた M 字曲線に注目したい。子育てがマラソンに影響しているわけだが,職業をもつ女性の曲線とマラソンを走る女性の曲線が重なっていることは就労とスポーツの関係を考えるうえで興味ぶかい。

表1は93年福知山マラソンの参加者を年齢別に集計したものである。男性の年齢別データの変化は『全国フルマラソン・ランキング』とほぼ重なっている。ここで60代が全体の1.4%

²⁾ ここでの叙述は,二回のフル・マラソン体験にもとづいている。 その大会は 1993 年 11 月 23 日に京都府福知山市で開催された「福知山マラソン」と, 1994 年 2 月 12 日に鹿児島県与論町で開催された「ョロン・マラソン」である。

³⁾ ランニング文化研究所編『全国フルマラソン・ランキング Vol. 5』(ランニング文化研究所, 1993年)

⁴⁾ このデータ総数と掲載数が異なるのは、約20,000人のランナーが複数の大会を走っているからである。また、このデータはエリート・ランナーから一般市民ランナーまでをふくんでいる。むろん圧倒的多数が一般市民ランナーであることは言うまでもない。

⁵⁾ たとえば、関西で最大の大会である「篠山 ABC マラソン」の市民ランナーのデータはふくまれていないし、また日本人が20,000 人近くも参加する「ホノルル・マラソン」のデータもふくまれていない。最近では「ニューヨーク・マラソン」や「ロンドン・マラソン」などの海外マラソンに参加するランナーが増えていることを付け加えておこう。

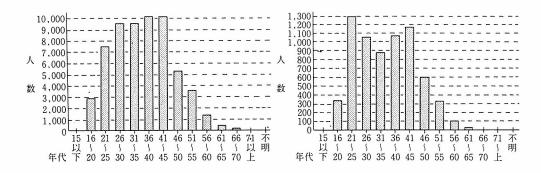


図1 '92 年度男子年代別完走者数

図 2 '92 年度女子年代別完走者数

表1 '93 福知山マラソン年齢別参加者数

			T	
年齢	女性		男性	
19歳以下	6	(0.7)	73	(1.0)
20-24歳	148	(17.1)	543	(7.5)
25-29歳	157	(18.2)	978	(13.7)
30-34歳	140	(16.2)	1,196	(16.8)
35-39歳	123	(14.3)	1,237	(17.3)
40-44歳	127	(14.7)	1,392	(19.5)
45-49歳	75	(8.7)	819	(11.5)
50-54歳	61	(7.1)	562	(7.9)
55-59歳	21	(2.4)	230	(3.2)
60-64歳	5	(0.6)	60	(0.8)
65-69歳	0		41	(0.6)
70-74歳	0		11	(0.2)
75-79歳	0		4	(0.1)
80歳以上	0		0	
合計	863	(100.0)	7,137	(100.1)

参加し、また70歳以上の参加者が15名いるという事実に注目したい。市民マラソンは高齢者が参加する大会である。また、1994年2月12日におこなわれたヨロン・マラソンでは参加資格が10歳以上と設定されており、おおくの小学生や中学生の参加が見られたこともつけ加えておきたい。つまり、市民マラソンは幅広い年齢集団が参加する大会なのである。

福知山マラソンに参加した女性のばあい, 『フルマラソン・ランキング』 とはすこし異なった年齢構成になっている。 ここではきれいな M 字曲線を描いてはおらず, なだらかな曲線を

表 2 '93 福知山マラソン・タイム別完走者数

タイム	女性	男性	
Sub 3	1 (0.2)	336 (6.7)	
3:00-3:30	40 (7.3)	1,189 (22.2)	
3:30-4:00	154 (27.9)	1,720 (32.1)	
4:00-4:30	111 (20.1)	1,192 (22.2)	
4:30-5:00	245 (44.5)	923 (17.2)	
	551 (100.0)	5,360 (100.4)	

描いている。その理由は、この大会の制限時間が5時間と設定されており、比較的制限時間がゆるやかな大会(ヨロン・マラソンは8時間)にくらべて走力に自信のあるランナーしか出場しなかったためであろう。つまり、『フルマラソン・ランキング』の曲線がM字を描いているのは、20代前半と40代前半の走力のあまりないランナーを数おおくふくんでいるためだと考えられる。

この点は表 2 を見ればよい。福知山マラソンにおいて完走した女性ランナーの約半数は制限時間ぎりぎりのランナーであった。それゆえ、もうすこし制限時間のゆるやかな大会であれば、20 歳前半と 40 歳前半の女性ランナーの参加が増えたと考えられる。

男性の完走者のうち、もっともおおい完走タイムは3時間半から4時間である。ここを頂点として3時間から4時間半の間に4分の3のランナーが42.195キロを走りきったことになる。ちなみにわたしのタイムは、4時間41分58秒であった。わたしはビリから10分の1程度のランナーである。

以上の4つのデータによって市民フル・マラソンの現状とその外観はつかめたのではないだろうか。では、このマラソンのなかにどのような社会学的意味を読み取ることができるのか。マラソンの社会学は可能か。

1. 意味付けの形成,「労苦」の回収

ジョギングを楽しんでいるランナーたちに「走りはじめた動機」を問えば、おおくのランナーはまず「健康のため」と答える。もうすこし具体的に答えるばあいは、「肥満対策」や「ストレス解消」、「血圧が気になって」という返答がかえってくる。そこで質問者はジョギングを「健康志向のスポーツ」、ジョガーを「近代的(アメリカ的)健康志向の人びと」と理解することになるのだが、しかしこの点についてはもうすこし慎重であってもよいだろう。というのは、「きっかけ」としての動機は時間の経過のなかで変化するものであり、また表明された

「動機」はランナーをランニングという行為へ常時つき動かしている原因というよりも, むしろ他者に説明するために準備された理由付けであったり, みずからのために準備された心理的合理化の論理(納得の論理)であることがおおいからである。

このような視点でランナーの言説を解読するとき、そこにはランニングにたいする意味付けの形成や採用、ランニング・イデオロギーの構築や消費という過程を発見することができる。ランニング雑誌にしばしば掲載されているランナーの「体験記」は、この意味付けの形成やランニング・イデオロギーの構築におおきく関与している。そして読者(ランナー)は、この形成され構築された意味付け図式をみずから選択的に採用し、ランニング、とりわけフル・マラソンを走る過程において消費しているように思われる。

ランナーがみずから記した「体験記」をいくつか拾ってみよう。安倍康子(56歳)は、失明 宣言をきっかけに走りはじめた夫に刺激されて、みずからも走りはじめた体験を「夫唱婦随で大病克服 "元気っていいな"」という体験記にまとめた(『ランナーズ』1994年3月号)。病気との闘い、夫婦の協力、爽やかさの発見、道すがらの人との交流、これらが体験記を構成している。高原昌彦(31歳)は、健康診断で「要受診」と診断されたことをきっかけにジョギングをはじめ、走ることによって広がってゆく世界や元気でいられることのありがたさ、そして気にも止めなかった草木の美しさや家族への感謝を「私の健康マラソン記」に書いた(同1991年2月号)。また、原田久人(43歳)は、子どもの頃の極貧生活、両親の死、3回の大手術、20回以上の入退院を繰り返しながら、苦しい人生のトンネルをマラソンによってくぐり抜けたことを「おやじ、思ったより走れるじゃない」という手記にまとめた(同1993年9月号)。さらに、渡辺清子(53歳)は、40歳をすぎ多忙でストレスのおおい生活のなかで「このままストレスをためていたら、精神的にまいってしまう。何かを始めなければ」と思いたち、「スポーツ嫌いがランニングに目覚めた」様子を回想している(同1991年1月号)。また、家庭不和や離婚という「体験記」が語られることもある。

ここには、類型化されたランニングの意味付け図式がある。それは、病気、苦しい人生、生きることの意味の喪失感などの「労苦」を一方におき、これらをランニングと出会うことによって克服し、ふたたび人生と出会うという図式である。それは、「苦悩 Unheil」が信仰と出会うことによって解消され、生きることの新しい意味を獲得するという宗教の基本図式と酷似している。こうしたランニングの意味付け図式(ランニング・イデオロギー)が、ランニング雑誌をとおしてたえず構築され、再生産されている。

と同時に、形成されるランニング・イデオロギーには、このような一種宗教的な意味付け図

⁶⁾ この「ランニング・イデオロギー」という語は、ここでは「ランニングの意味付けの体系」という 意味でもちいる。

⁷⁾ この体験記は、安倍康子著『元気っていいな』(地湧社)という単行本にまとめられている。

式とはべつに、快感主義とでもよぶべきものがある。さきの安倍康子が語っている「爽やかさの発見」、高原昌彦の語る「草木の美しさ」との出会いとは、この快感主義のもっとも小さな告白であろう。だが、快感主義の最大公約数的表明は「走ることは楽しい」という端的な告白である。このような言説はランニング雑誌にあふれているのみならず、ランナーたちが交わす会話のなかにつねに発見することができる。また、しばしば雑誌に現れる「華やかなランニング・ウェアで気分も変身」という提唱も、ランニングの快感主義的意味付けを形成するものである。

ところで、この「労苦」と「快感」の意味付け図式のうち、とりわけ「労苦」の図式をランナーのすべてがもっているわけではない。すべてのランナーが病気や離婚、失明や貧困の体験をもっているわけはない。ただ、ランナーたちが走りながらみずからの「労苦」をランニング・イデオロギーにしたがって発見し(「労苦」のランニング・イデオロギーの採用)、みずからの小さな「労苦」(人間関係の煩わしさ、仕事上のトラブル、家庭内の心労、ささいな口喧嘩、なんとはなしの倦怠感や不安など)の回収作業をおこなうことはしばしばある。とりわけフル・マラソンというスポーツは、それじしんが「労苦」であり、この「苦しみ」のただ中にあることがランナーたちに、たとえささいで日常的な「労苦」であっても、それを発見し回収(昇華)することを容易にするからである。ランナーたちがしばしば口にする「ストレスが解消される」、「走ったあとの爽快感」という言葉は、この「労苦」の回収作業が終了したことを示すものであるだろう。

フル・マラソンが「労苦」の回収の場として適しているのは、その 42.195 キロという距離 の長さにある。 5 キロや 10 キロのマラソンでは「労苦」の回収作業には距離が短かすぎる。 むろんこの距離でも、身体的・生理的爽快感を手にすることはできるけれども、しかし走る行為を生活や人生の「労苦」に結びつけるほどの「苦しみ」の時間をもつことはできない。身体 的・生理的「苦しさ」がべつの「苦しさ」に転移され解釈されるには、ランニングのなかでこの転移作業をおこなうだけの時間的余裕がなければならない。42.195 キロという距離(と時間)は、それには十分な距離(と時間)である。

と同時に、フル・マラソンは「労苦」の回収作業にはうってつけの舞台を提供する。スタート直後からつづく沿道の応援は、ランナーたちに舞台にあがった俳優のような感覚をあたえることになる。身体的・生理的・心理的快感(「ランニング・ハイ」)の状態で走っているランナーたちは、舞台のうえで颯爽と演技する俳優のような感覚をもつことができる。だが、この舞台が重要な意味をもつのは、おおくのランナーたちが30キロすぎから味わうことになるエネルギー枯渇と筋肉疲労(痙攣)の状態においてである。そこからフル・マラソンの本当の「苦しみ」がはじまるのだが、このとき沿道の応援は「労苦」を乗り越えようとするランナーたちにとって重要なサポーターとなる。観客はただ観ているのではない、わたしの「苦しみ」をとも

に乗り越えようと援助してくれるサポーターなのだ、とランナーたちは解釈する。「頑張れ」、「ファイト」、「もう少し」という声援は、肉体的・生理的「苦しみ」克服への声援でありながら、ランナーたちはいま回収しようとしている社会的・生活的「労苦」克服のための声援として理解する。

さらに指摘しておきたいことは、フル・マラソンにおける「同行者」の存在である。一般の市民ランナーはフル・マラソンを孤独に走ったりはしない。声をかわし、目で合図をおくり、助け合いながら走る。市民マラソンのレースにおいては、おおくの「同行者」集団が実力に応じて形成される。そしてこの「同行者」は、おなじ「苦しみ」を体験している仲間であり、おなじような「労苦」の回収作業をおこなっている同伴者でもある。かれらの存在が「労苦」の乗り越え作業を容易にする。フル・マラソンがこの作業の舞台としてうってつけなのは、このような距離と時間、サポーターとしての観客、そして「苦しみ」の「同行者」を提供するものであるからだろう。

とすれば,フル・マラソンは旅に似ている。「旅 travel」と「労苦 travail」との関係,旅における「労苦」の克服,旅の道づれ,旅のおわりに出会う「新しい自己」という図式はフル・マラソンの図式でもある。一般化した旅が近代社会の産物であったように,フル・マラソンが一般化したのも,近代の原理が十分な展開をみせた社会(70年代のアメリカ,80年代の日本)においてであった。近代社会の重要な構成原理である「健康志向」という指標でジョギング文化が解釈されるのは,このような近代とマラソンというスポーツとの関係を見ているからであろう。しかし,その「健康志向」という指標の背後には,ランニング・イデオロギーの形成とその選択的採用,そして採用された図式による日常的「労苦」の回収作業という心情の発露が存在していることを見落としてはならない。と同時に,マラソンと近代との関係については,もうすこし慎重であってもよいと思う。

2. マラソンと近代

わたしがジョギングを始めたのは、1989年のことである。 留学先でお世話になっていたカリフォルニア大学の同僚たちが、ロサンゼルス・マラソンに出場しないかと声をかけてきたからだった。その時わたしには、フル・マラソンを走るなどということはとても考えられなかった。だから「フルなんて無理だよ」と答えたのだが、同僚のひとりは「でも、走ることはできるだろう。お前には足がある」と言った。ここにはすでに、マラソンの基本図式が現れている。だれでも42.195キロという距離には圧倒される。この距離を走りきるということは不可能に

⁸⁾ この「旅」―「労苦」―「新しい自己」の関連については、拙稿「ツーリズム文化の現在」(『旅の文化 史』、駸々堂、1993年)を参照せよ。

ちかい、という印象を未経験者はもつ。しかし、走るという行為じたいは、特別に重い障害をもっている者をのぞいて、人間にとってはきわめて簡単な行為である。走るという単純な運動は、たとえ片足をうしなった者でさえ、松葉杖をもちいればおこなうことができる。つまり、マラソンの第一の特長は、だれにでもできる運動でありながら、だれにでもは達成できない運動として認知されるスポーツであるということだ。この極端な接近可能性と極端な達成不可能性の併存がマラソンの特長である。しかし、極端な接近可能性と極端な達成不可能性の併存とは、近代社会の基本的な構成原理ではなかったか。

たとえば、デパートを考えてみればよい。そこは「アントレ・リーブル(出入り自由)」の世界である。デパートにおいては、社会階層や服装、なじみであるかどうかによって入場が拒否されることはない。だが、かつての小売店はそうではなかった。店内に入ることができるのは、一定の社会的属性をもつ者に限定されていた。 貴族的歓楽装置(たとえばオペラ座)における「社会的閉鎖」の原理は、社会のすみずみにまで貫徹していた。これが商業活動において崩壊したのがデパートである。

しかし、デパートは入場こそ容易であるけれども、そこでのじっさいの購買行為には歴然とした社会的格差がともなっていた。きらびやかな装飾は高価な商品の魅力を人びとに印象づけたのだが、この印象刻印作用が強力であればあるほど、人びとはそれを購入するだけの能力(資産)がないこと、つまり自分が社会的な無能力者であることを痛感させられることになる。近代社会は人びとに商品への平等な接近を可能にしながら、じっさいにその商品を手にいれることについては達成困難な実感をあたえたのだった。デパートとはこの極端な接近可能性と極端な達成不可能性が交差する社会的な空間であった、ということができるだろう。それは「開放しつつ閉鎖する」経済活動の成立であった。

この「開放しつつ閉鎖する」というメカニズムは、近代的教育システムにおいてこそ巧妙に編制される。公教育システムは「開放」された社会システムではある。しかし、社会全体にこの公教育システムが拡大することによって、教育的階悌の最上部(大学、とりわけ東京大学)までの上昇はきわめて困難なものだという印象を社会全体の共通認識にすることになった。また、じっさいこの最上部への加入はきわめて困難なものとなる。

しかも、その困難性の原因を、もはや教育システムのせいにすることはできない。このシステムは原理的には「開放的」なのだから、到達できないとすればその原因は個々人の能力に帰せられることになる。達成不能の原因が近代社会においては社会から個人に転嫁されたわけである。ここに近代的教育システムの「開放と閉鎖」の巧妙な社会的選別の論理があった。それ

⁹⁾ デパートと近代社会の関連については、拙著『知と権力の社会学』(世界思想社,1994年)の第4章「知と心情の世紀末」を参照されたい。

^{10) 「}開放と閉鎖」の問題や近代的教育システムの狡智については、同書、第2章「『知の資本』と閉鎖理論」、および第6章「知と再生産、信仰の知」を参照せよ。

ゆえ,近代的教育システムの基本的編制原理は,極端な接近可能性と極端な達成不可能性をたくみに組み合わせたことにあった。

この図式がフル・マラソンのなかにある。とすれば、マラソンを走るという行為は、近代社会を生きているわたしたちにとってどんな意味をもつのだろうか。おそらく、このように解釈することができるだろう —— 近代人としてのランナーたちはマラソンを走る行為のなかで近代の論理と出会い、それを勝ちぬくという疑似体験をしている。現実の生活のなかで近代の論理にたいする勝利者になることはけっして容易ではない。しかし、この勝利の困難性を実感する者であればあるほど、接近と達成をめぐる疑似体験の場はおおきな意味をもつ。マラソンは、「だれにでもる」単純な行為をさいごまで押し通すことによって、「だれにでもはできない」目標を達成するための絶好の場を提供する。マラソンを完走することほど、手近に近代の論理にたいする勝利者の疑似的実感を味わうことができるものはない。もっともおおくマラソンを走る世代が男性の中年世代であることの意味は、おそらくここにあるだろう。

と同時に、つぎのことも考えておかなければならない。たしかにマラソンは極端な接近可能性と極端な達成不可能性をもつものではあるが、しかしそれは、だれにでもはできないように見えて、じつはだれにでもできる可能性をもったスポーツであるという逆の特徴もまた存在していることだ。極端な達成不可能性という外観と、練習さえつめば達成可能であるという実態がマラソンにはある。 50 歳をすぎてジョギングをはじめ、ついにはフル・マラソンを完走した事例はいくらでもある。そのような記事はランニング雑誌につねに掲載されている。また、80 歳をこえた老人が完走する事例もある。93 年の福知山マラソンでは、60 歳代の参加者は男女あわせて 106 人、70 歳代でも 15 人のランナーが参加している。『全国フルマラソン・ランキング』によれば、92 年度のマラソン完走者のうち 60 歳代の男女は 839 人、70 歳代では 79 人である。80 歳代でもふたりの男性が完走している。だから、「あなたにもフル・マラソンが走れます」という特集がランニング雑誌にしばしば掲載されるわけである。そしておおくのマラソン完走者は、初心者を見つけては「だいじょうぶ、練習すればかならず走れるから」と誘うのである。カリフォルニア大学の同僚たちも、そんな気分からわたしをマラソンに誘ったにちがいない。そして今わたしも、友人たちに「だいじょうぶ、走れるから」と誘うことになってしまった。

この、練習さえつめば完走が可能であるというマラソンの特徴は、このスポーツにある社会的役割を付与することになった。それは、このスポーツがさきに述べた、巧妙で冷酷な近代の選別の論理にたいする代償的実感を味わうにはうってつけのスポーツであるという役割である。ここに、近代社会の構成原理にたいする代償機能を発揮するマラソンというスポーツの文化的な意味がある。それは、社会的安定化のための文化装置、とでも表現できるだろう。近代社会のなかで一般化したマラソンというスポーツは、その近代社会の論理の冷酷さを疑似的に乗り

越える体験をランナーたちにあたえながら、まさにその近代社会を安定化する機能を担っていると解釈することができる。

3. 「異質な同行者」

ところで、マラソンというスポーツは、上記のような近代社会との順機能的関係ではとらえられない側面もまたもっている。そこには近代性をのり越える契機さえ存在している。この節ではこの問題についてひとつの視点を提示してみよう。

TVでマラソン・レースを観戦している人びとは、マラソンとは競争のスポーツであると感じたり、そこに社会的意味をもったドラマを読みとろうとする場合には、マラソンを脱落と生き残りのドラマであると理解しがちである。そしてマラソンのなかに、いかにも近代的な競争のドラマを読み取ろうとする。このような印象を視聴者にあたえるのは、TVカメラがトップ集団をもっぱら追いかけ、とりわけエリート・ランナーの動向を追いつづけることに原因がある。たしかに、エリート・ランナーにとってマラソンとは競走であり、脱落と生き残りをかけたドラマであることはまちがいない。

しかし、それは一部のエリート・ランナーにとっての話であって、一般の市民ランナーはマラソンをけっして競走として走るわけではないし、それを脱落や生き残りのドラマとしてとらえるわけでもない。体験的実感から確信をもっていえることだが、おおくの市民マラソン・ランナーのあいだに競争は存在しない。ながく苦しいマラソンにおいて、ランナーたちのあいだに展開されるのは多種多様な交流であり、かれらはこの交流を楽しみながら走りつづけるのである。そこに存在しているものはコミュニケーションであり、競争とは対極にある一緒に走りぬくという共同作業である。それゆえ、市民マラソンを読み解く際のキーワードは「競争」ではなく、むしろ「同行」と表現したほうがよい。この点がマラソンを単純に近代社会との機能連関でとらえることができない点であり、また近代の原理をこえる要素をマラソンにあたえるものでもある。

0. 節の資料がしめすとおり、大部分の市民ランナーは 42.195 キロを 3 時間半以上の時間をかけて走りぬく。またすでに述べたように、その間、かれらはだれとも話をせず、孤独に走りつづけるわけではない。若者たちは可愛い女性ランナーをしばしばナンパしようとするし、中高年のランナーたちはたがいに励まし合って走りぬこうとする。派手な仮装をして人びとの関心をひこうとするランナーは、どの大会会場にもかならずいるものだ。かれらは競争になど関心はない。求めているものは道すがらの交流であり、そのためにかれらはパフォーマンスに精をだす。

そして4時間の完走ペースで走っていると、ある事実に気がつく。それは10キロ地点で出

会ったランナーは 20 キロ地点でも出会うし、30 キロ地点でも出会うということである。10 キロ地点で抜きさったランナーに 20 キロ地点では抜きさられ、また 30 キロ地点で逆に抜き返すということがしばしばおこる。 といって、 それは競走ではない。 たがいに抜きさろうとして走っているのではなく、結果として抜きつ抜かれつするだけである。だからわたしたちランナーは、その度に言葉を交わし合うのである。つまり、市民マラソンにおいて 3 時間半以上で走ろうとするランナーたちは、その能力に応じてゆるやかな同行者の集団をいくつも形成しながら 42.195 キロを走っているということができる。これがフル・マラソンを実際に走ってみて見えてくるものである。

いくつも形成された同行者の集団は、マラソンを一定の時間で走るという能力に関して同質な集団である。この意味では、同行者集団とは同質者の集団ということができる。しかし、この同行者集団は、社会的属性という点からいえば、きわめて異質者の集団でもある。

このようなデータをしめそう。 1989 年 4 月から 1993 年 3 月までの年代別トップのリストを見れば,50 歳男性のトップは会田孝男(2:33:33),女性は井出雅子(3:00:41),60 歳男性のトップは鈴木省吾(2:53:50),女性は嶌寄方子(3:21:25),65 歳男性のトップは渡辺寿(3:08:09),女性は浅見慶子(4:12:56),70 歳男性のトップは秋元芳男(3:16:42),女性は古屋美栄子(4:43:34)であった。このデータがしめしているものは,3 時間のペースで走る集団のなかには若い男性にまじって 60 代の男性もいれば 50 代の女性もいるということである。つまり 3 時間以上のランナーは年齢的にいえば,10 代から 80 代までの異年齢集団によって構成されることになる。 そこでは性別も混在する。 男がはやい, 女はおそいなどという予断はまったく意味をもたない。年齢,性別はむろんのこと,職業も学歴も,国籍も出身地も政治的立場も異なった人びとが,ただマラソンの完走能力という点においてのみ同質者となる。そしてかれらが,42.195 キロのあいだに同行者として交流するのである。このような異質者でありつつ同質者でもあるという同行者の集団が形成されるところに,市民マラソンの社会学的意味がある。

この同行者集団の交流はランナーたちにどのような意味をあたえるのか。なによりそれは、社会的差異(格差)を相対化するという意味をもつ。年齢、性別、社会的地位、学歴、国籍、文化的・経済的・政治的帰属などの社会的差異の意味合いがうすれ、きわめて単純な属性(42.195 キロをあるペースで走ろうとする能力)によってこの差異が解消されてしまう。それは同程度の身体能力による社会的格差感覚の無化作用と表現してもよいだろう。それゆえ同行者集団における交流は、この身体を基礎にした交流となる。

70歳をすぎたランナーが、真っ赤な地に白く「たまランナー」と染めぬいた T シャッを着て走っている。かれは、すれちがうランナーたちに誰かれとなく「これ、ええやろ。ほんま、マ

¹¹⁾ このデータも『全国フルマラソン・ランキング』によった。

ラソンはたまらんなー」と声をかける。その時かれは、老人の表情をしてはいない。声をかけられたランナーたちもかれを老人とはとらえない(とらえられない)。ちょっと洒落っ気のある、しかしおなじレベルのランナーとしてしかとらえられない。小学生の息子が父親を気づかいながら走る。妻が夫を励ましながら走る姿も見うけられる。さっきまでナンパしようとしていた若者をナンパされていた女性が勇気づける姿もある。マラソンのなかでは社会的地位や役割、ステレオタイプ化された社会意識の逆転現象がいたるところで生じている。当たり前のことだが、走るという行為にとって社会的属性はなんの意味ももちはしない。社会的属性は、走るという身体能力の前で頭を垂れざるをえない。同行者とは、この走る身体能力でつながった平等な存在である。

それゆえ、ランナーは同行者集団に属することで、社会的存在としての自己、社会関係や社会的役割の束としての自己を捨てさる感覚をあじわうことができる。だが、このこと、つまり社会的存在としての自己を捨てさる実感とは、近代社会を生きる(生きざるをえない)現代人にとってはめったに体験することのできない機会でもある。近代社会は人間をいっそう錯綜した社会関係のなかに拘束することを必然化してきた。機能分化した近代社会とは、輻輳する関係(役割)のなかで人間を引き裂く社会のことであった。またそれは、輻輳した関係を階層化された秩序のなかで構成しなおし、人間を位階制的な社会空間のなかに拘束する社会のことであった。同行者集団は、この錯綜し、輻輳化し、階層化された社会関係の束をたち切り、ひとときの社会的真空状態の体験をランナーたちにあたえることになる。かれらの関係はきわめてシンプルな身体的な関係に還元されてしまう。

むろん,あるゆるスポーツはこの身体的還元という機能をもってはいる。草野球においてもスキーにおいても、およそスポーツは社会的属性を相対化し、人間(関係)を身体(運動)のレヴェルに還元するものである。ただし、還元された関係が会話をともなうこと、その実感がながい時間の経過のなかで体験されること、大量の同行者集団(福知山マラソンにおいて3時間半から4時間の完走者は1,874人、4時間から4時間半の完走者は1,303人、4時間半から5時間の完走者は1,168人であった)を形成し、相対化される社会的属性が広範囲かつ大規模になること、このような特徴を他のスポーツに発見することはむつかしい。スポーツにおける身体的還元作用は市民マラソンにおいてもっとも強力かつ大量に作用する、ということができるだろう。

この身体的還元によってひき起こされるものの社会学的意味を,ここでは「社会関係の単純化」と表現したい。それは,いわゆる「生身のつきあい」と言い換えてもよいものである。そして,「生身のつきあい」をする機会がなかなか発見できない現代人だからこそ,その機会をあたえてくれるマラソンはおおきな意味をもつ。「異質で同質な同行者」集団を形成する市民マラソンの社会学的意味はここにある,といってもよいだろう。そしてそれは,機械的に編制された近代社会からのひとときの「離脱の体験」とさえいうことができるかもしれない。ただ,

この「離脱」の問題については慎重でなければならない。この点については、最後の節で再度 ふれることになる。

4. Exhaustion の 快感

ところで、マラソンというスポーツには重大な特徴がある。それは、このスポーツが「消耗 exhaustion」のスポーツであるということである。 むろんすべてのスポーツはなんらかの肉体的消耗をともなうけれども、しかし、マラソンほど激しく、多岐にわたる消耗をともなうスポーツはない。そして、この消耗という特徴がマラソンにある社会学的意味をあたえることになる。

フル・マラソンを走れば体重は 4 キロから 5 キロ減少するといわれている。じじつ,わたしも福知山マラソンによって約 4 キロの体重が減少した。42.195 キロを走るという行為は激しいグリコーゲンの枯渇をもたらす。これが脂肪の燃焼につながり,体重を減少させることになる。だが,このような肉体的消耗だけではなく,マラソンにおいてはなによりも精神的消耗感がつよい。 市民ランナーが 30 キロ過ぎから経験するエネルギー切れや筋肉の痙攣現象は,かれらにつよいストレスを強いることになる。それでも走りきろうとすれば,かれらの精神的消耗感はおおきなものにならざるをえない。

しかし、ランナーたちはマラソン大会においてはじめて消耗の体験をするのではない。かれらは大会に出場する前にすでに肉体的消耗を体験しているし、この体験がなければフル・マラソンを走ろうとは考えない。つまり、事前のトレーニングにおいてランナーたちは消耗の体験をしているのである。一般の市民ランナーたちはフル・マラソン大会に出場する前に月間200キロ以上のランニングをしているといわれている。このトレーニングによってランナーたちは「ランナー的体型」に変身するのだが、この体型は脂肪がおち、コレステロールが減少し、血圧が下降し、筋肉組織も細くなった、いわゆる痩身化された体型と生理のことである。おおくのランナーたちはランニングの動機として痩身を挙げるけれども、しかしこの「目的としての」痩身はランニングをつづけることによって走りきるための痩身、つまり「手段としての」痩身に意味を転換する。ランニングの経験のない外部の観察者がランナーたちを「健康志向」を評価するとき、このような動機の意味転換の過程がしばしば見落とされるている。だが、ランナーたちはマラソン大会の以前に消耗による痩身を手段として準備し、その上でさらに大会において激しい消耗を体験するのである。

ところで、ここで言う「消耗」とは、たんなる肉体的・精神的疲労感をさしているのではな

¹²⁾ 体型が細くなることは体力がなくなることを意味しない。当然のことだが、筋肉組織が細くなることは筋力が落ちることを意味しない。マラソンを走るためには筋力を増強しなければならない。

い。むしろそれは、なにか(脂肪・グリコーゲンなど)を「使いきること」、それによってなにかを「捨て去り」、身体から「削ぎおとし」、身体を「身軽にすること」を意味している。この意味でそれは、「放棄 abandonment」、「剝離 divesture」、「荷降ろし discharge」を含むものである。ちょうど「所有 possession」、「蓄積 accumulation」、「賦与 investiture」、「負荷 charge」の対極にあるものを、ここでは「消耗」と表現している。そしてこのように表現したときはじめて、「消耗」のスポーツとしてのマラソンの社会学的意味が見えてくる。

ここで 0. 節で紹介した,図1, 2 を思い浮かべよう。フル・マラソンをもっともおおく走る世代は,男女合計で考えれば 36 歳から 45 歳の世代であった。そしてこの 10 年の年齢階層に属する人間は,肉体的に「肥満 fatness」のはじまる世代であり,またかれらは社会的に「所有」,「蓄積」,「賦与」,「負荷」の必要や息苦しさを味わいはじめる世代である。この世代に「消耗」,「放棄」,「剝離」,「荷降ろし」という特性をもつマラソンが好まれるとすれば,マラソンの社会心理学的意味を推察することは容易にできるだろう。それは,「身軽になること・荷を降ろすこと fato discharge」が現代人にいかにおおきな快感をあたえることになるかを推察することでもある。

現代社会において肥満とは、けっしてたんなる身体問題ではない。とりわけ中年世代にとっては、たんなる身体問題ではない。かれらが肥満を忌避するのは、それが病につながり、この病が家庭人としての責任や社会人としての活動を阻害することを恐れているからである。それゆえ、かれらが肥満を忌避する心情の背後には社会的原因が存在しており、この意味で肥満とはたんなる身体問題ではなく、すぐれて社会的問題であるということができるだろう。

と同時に、かれらは社会的肥満の世代でもある。現代社会はこの世代の人びとに多種多様な義務の「蓄積」と社会的責任の「負荷」を強いており、この「蓄積」と「負荷」の集積じしんが、かれらにとっては肥満の社会的メタファーとなる。身体的肥満が身体的過剰負担の原因であり、身体的病への警鐘であるように、社会的肥満は社会的過剰負担の原因であり、社会的病への警鐘でもある。とりわけかれらは生理的に肥満の世代であるわけだから、身体的肥満は社会的肥満とたえず重ねあわせられることになる。とすれば、身体的肥満の解消が社会的肥満の解消と重ねあわされても不思議ではないし、逆に社会的肥満が身体的肥満と重ねあわされても不思議ではない。ここに「消耗」のスポーツとしてのマラソンが中年世代に受け入れられる社会心理学的原因があるのではないか。かれらにとって身体的に「身軽になること discharge」は、社会的に「荷を降ろすこと discharge」を意味していると推察してもあながち間違いではないだろう。

このような推察をここで提示するのは、3. 節で述べたマラソンにおける 「異質な同行者」の社会学的意義を考えているからである。ながい時間の経過のなかでつぎつぎと出あう多種多様な「同行者」の存在は、ランナーたちに社会的関係の漸次的な「剝離 divesture」の実感を

あたえる。こうしてランナーたちに社会関係を単純化してとらえる可能性をあたえる。「異質な同行者」の社会学的意義は、「社会関係の単純化」にあった。この社会関係の単純化こそ、社会的肥満の解消を意味している。つまり「生身のつきあい」とは背負いこんだ社会的役割と地位関係を捨てさり、平等な身体のレヴェルで関係を構築しなおすことだからである。と同時に、「生身のつきあい」とは、過剰で過重な役割圧力からの「解放 discharge」を意味している。社会的肥満というメタファーに対応させていえば、社会関係の単純化を社会的痩身と表現することができるだろう。錯綜し蓄積された社会関係の束をマラソンの道行きの途上でかりそめに捨てさる実感、これが社会的痩身の実感となる。

さらに,さきの推察を提示する理由は,ランナーたちが表明するランニングの効用のなかに 社会的痩身の実感を読み取ることができるからである。1. 節で紹介したいくつかの手記にお いてもそうなのだが,ランナーたちの「体験記」はきわめてシンプルな結論(きわめてシンプル な獲得物の提示)で終わることがおおい。 たとえば, あるがままの現実を受けいれることの大 切さ,生きていることへの感謝,人の好意のありがたさ,家族の愛の発見,食事がおいしく食 べられること、よく眠れること、毎日が楽しいという実感、生活のはり、などである。具体的 な言葉を拾えば,和泉幸喜(36歳)は「疲れが重なるのに反比例するかのように,心の中はど んどん素直になって、あらゆるものをそのままの形で受け入れようとする気持ちになっていき ます」(『ランナーズ』1993年10月号)と表現したし、神田康子(42歳)は「家族みんなで目指し た東京国際マラソン」の体験を「何よりも子どもたちのけなげな応援に、どんなに助けられた ことかわかりません」(同 1993年 7 月号)と回想している。盲目の落語家・笑福亭伯鶴(36 歳) は「痛いもんは痛い,しんどいもんはしんどい,動けんもんは動けん」とあるがままの自分を 受けいれることの貴重さ(同1994年3月号)を告白している。ここで表明されているものは、 社会の側から押しよせてくる当為の規準や役割の圧力からのがれて,あるがままの現実やその 中においても発見することができる小さな喜びを生活の支えにしようとするランナーたちの態 度である。わたしが社会的瘦身というメタファーによって表現したいものは,このような社会 にたいするスタンスの変更や社会を解釈する図式の単純化のことである。

「消耗」のスポーツとしてのマラソンが肉体的消耗をこえてランナーたちを惹きつけるのは、このような過程がランナーたちの心情をとらえたからであろう。それは社会関係の漸次的「剝離」感を体験することによって、単純化された社会の解釈図式を獲得することである。だが、このような社会的痩身の過程は、ランナーたちをふたたび現実に立ちむかわせる準備作業なのかもしれない。過剰に沈殿した社会的澱を洗いながすマラソンは、ランナーたちにこの現実、

¹³⁾ ここで「シンプル」だから価値はないなどといっているのではない。現代社会おいて「シンプル」 であることほど困難なことはなく,その意味で「シンプルな獲得物」はきわめて貴重なものだということができる。ただ,その「シンプルさ」がはたす社会的働きがどのようなものであるかは考えておく必要があるだろう。この点は,最後の節で述べる。

この日常生活の変更をせまり、べつの日常へと「離脱」させるというよりもむしろ、この現実 との「和解」へとみちびくものなのかもしれない。最後の節では、ランニングによって編制し なおされる、このようなランナーたちの心情のゆくえを記述してみよう。

5. 「変化」、「剝離」、「回帰」

ランニングとは、ひとつのアディクションである。癖になる。それは、コカインやLSDなどのドラッグと似ている。ただ、ドラッグと異なるのは、このアディクションが反社会性を帯びない点である。

ランニング・アディクションが反社会性をもたないのは、ランニングという行為がきわめて 接近可能なものであることに由来している。だが、それだけではない。このアディクションが もたらすオブセッション(取りつかれ)のかたちが社会的抑圧感を相対化し、軽減することに も由来しているだろう。つまりランニングへの取りつかれが、身体的・生理的快感にむすびつ くだけでなく、社会生活をおくる上での快感(社会的痩身の快感)とむすびついているところが、 ランニング・アディクションに反社会性を帯びさせない原因である。

むろん,あらゆる趣味やスポーツの世界は、社会的痩身の感覚を人びとにあたえることができる。つまり、趣味やスポーツは、社会的活動とは直接に関係のない領域に人びとを没頭させることによって、社会からの相対的遊離感を体験させるものである。この遊離感が人びとにリフレッシュメントの実感をあたえるのは、社会的痩身によって生活のリクリエーション(再構成)が可能になるからである。ただし、ランニングがもたらすアディクションとオブセッションは、直接的に身体的習慣化・取りつかれという形態をとる(脳内麻薬物質の分泌、肩こり・便秘・頭のモヤモヤの除去、ランニング・ハイの快感)ゆえに、社会的痩身へのエネルギーは他の趣味やスポーツにくらべればはるかに大きなものになることは間違いない。

さて、この社会的痩身によってランナーたちにもたらされるものの社会的意味がここでは問題である。変化し、「再構成」された世界は、現実からの「離脱」という意味をもちうるのか。 それとも現実に「回帰」し、現実との「和解」に収束するのだろうか。

ここで 1. 節や 4. 節でとりあげたランナーたちの手記を思い出そう。そこにあるのは,種々の社会的労苦をランニングによって克服・解消し,きわめてシンプルな獲得物を手にして人生を生きることの意味を再発見してゆくランナーたちの姿である。この時,かれらはこの現実から「離脱」したのではない。むしろ,錯綜する社会的圧力の束をランニングというオブセッションによってすこしづつ脱ぎ捨ててゆき(社会的圧力の束の「剝離」),シンプルな人生の意味付けによって再構成したのである。世界についてのべつの解釈図式を獲得してべつの生き方を選択したというよりも,解釈図式を「単純化」させることによって現実と「和解」して現実に

「回帰」したといったほうがよい。痩身願望が「肥満は美しい」という価値観の否定のうえになりたっており、既存の価値意識の転覆をめざすものではないように、社会的痩身願望もまた既存の価値観の転換をめざすものではない。それゆえランニングは、既存の日常からの脱出をもたらすものではなく、日常を再構成することによって日常との「和解」に収束するものである。ランナーの一般的印象が「まじめ」とか「明るい」とか「ふつうの人」というものであるのは、このためだろう。むろんこの日常との「和解」は、マラソンやランナーにかぎりはしない。およそスポーツに既存の現実からの脱出(「離脱」)をもとめたり、スポーツマンに既存の社会への「対抗性」をもとめることは、もともと無理な話なのかもしれない。

しかし、だからといって、マラソンやランニング(ここではスポーツ一般と拡大解釈してもよい)が既存の社会や文化を転換したり否定するものではなく、結局は既存の社会生活を安定化する「保守的なもの」にすぎないのだと考えるとすれば、それは、そのように思考する者たちの発想のエリート性を露呈したにすぎないだろう。というのは、そのように思考する者たちは、べつの生活が実際に可能だと考え、たんなる解釈図式の「単純化」にとどまらず実際の生活が「単純化」されること(「シンプル・ライフ」)は可能だと想定するのだが、しかしおおくの人びとはそのような生活に憧れることはあっても、実際にそれが可能だとは考えないからである。べつの生活や実際に単純化された生活をはじめようとすれば、それは特殊な閉塞されたコミューンのなかでしか可能ではない。しかしおおくの一般的な人生は、否応なくこの現実からはじめようとするものである。そのような生き方にとって「シンプル・ライフ」とは、現実をたとえ意識の内にすぎなくても解釈しなおし、解釈図式の「単純化」によって獲得できるものに終始する。それ以上のものを想定するのは、過度な観念主義でありエリート主義にすぎないだろう。

だが、「ふつうの人びと」にとっては、マラソンによって獲得する社会的痩身、社会的役割の「剝離」の実感、シンプルな解釈図式の獲得による現実との「和解」や日常生活への「回帰」こそが、硬直化し錯綜した人生にたいする実際的な対抗の論理なのかもしれない。というのは、現実とはけっして客観的なものではなく、主観的に構成されたものこそリアルな現実であり、それゆえ現実にたいする対抗の形もまたこのような主観的に構成された現実のなかでの意味の組み換え作業でしかありえないからである。それゆえランナーたちが、いまある現実から実際に「離脱」するというよりも、たえず現実にたいする解釈図式を「単純化」することによって生活や人生の意味の組み換えをおこなうことは、かれらに実際的な対抗性をあたえるものであるだろう。マラソンがランナーたちにあたえる現実への対抗性は、主観的に構成された社会にたいして主観的にその構成を「単純化」することによってもたらされる。「再構成されたでecreated」人生とはそのようなものであるし、「再構成する recreating」マラソンの社会的意味もここにある。むろんそれは、もはやマラソンにかぎらずスポーツ一般がもつ社会的な

対抗性かもしれない。それゆえ、「和解」や「回帰」という言葉からランナーやランニングの「保守性」だけを引きだすとすれば、それは「ふつうの人びと」の感性や社会の主観的構成の意味を忘れさったエリート主義でしかない。

M. セルトーの言葉をここで思い起こしておくことは無駄ではないだろう。かれはこのような言葉を残して死んだのだった。「否応なくそこで生きてゆかねばならず,しかも一定の掟を押しつけてくる場から出てゆくのではなく,その場に複数性をしつらえ,創造性をしつらえるのだ」(傍点セルトー)。たしかに社会は,たえず人びとを一定の枠のなかに押しこめようとする。その際社会は,人びとの心情さえも編制し搦めとろうとする。社会は安易な「離脱」を許すものでもない。しかし,その枠の中でみずから(マラソンやスポーツ一般によって,まさに主観的に)心情を編制しなおことができれば,それじしんが社会にたいする対抗の論理に転化する可能性はじゅうぶん考えられる。それは「和解」や「回帰」という言葉によってしめされる対抗の論理であるだろう。市民マラソンに希望があるとすれば,それはここであるにちがいない。

1994年4月5日 受理

¹⁴⁾ M. セルトー『日常的実践のポイエティーク』(山田登世子訳,国文社,1987年),91頁。